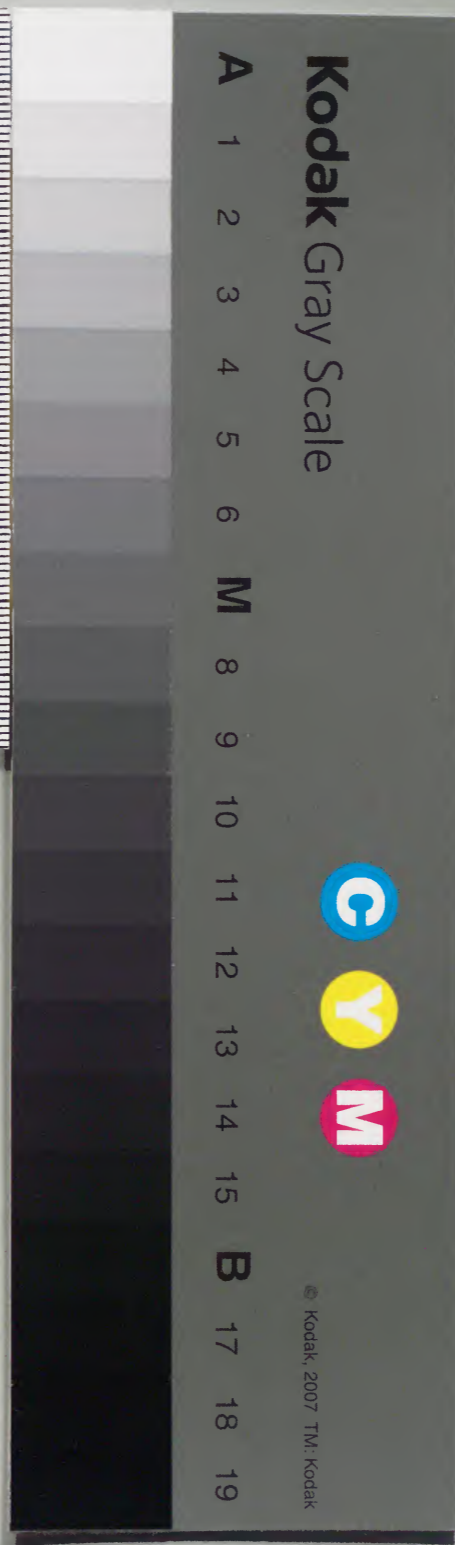
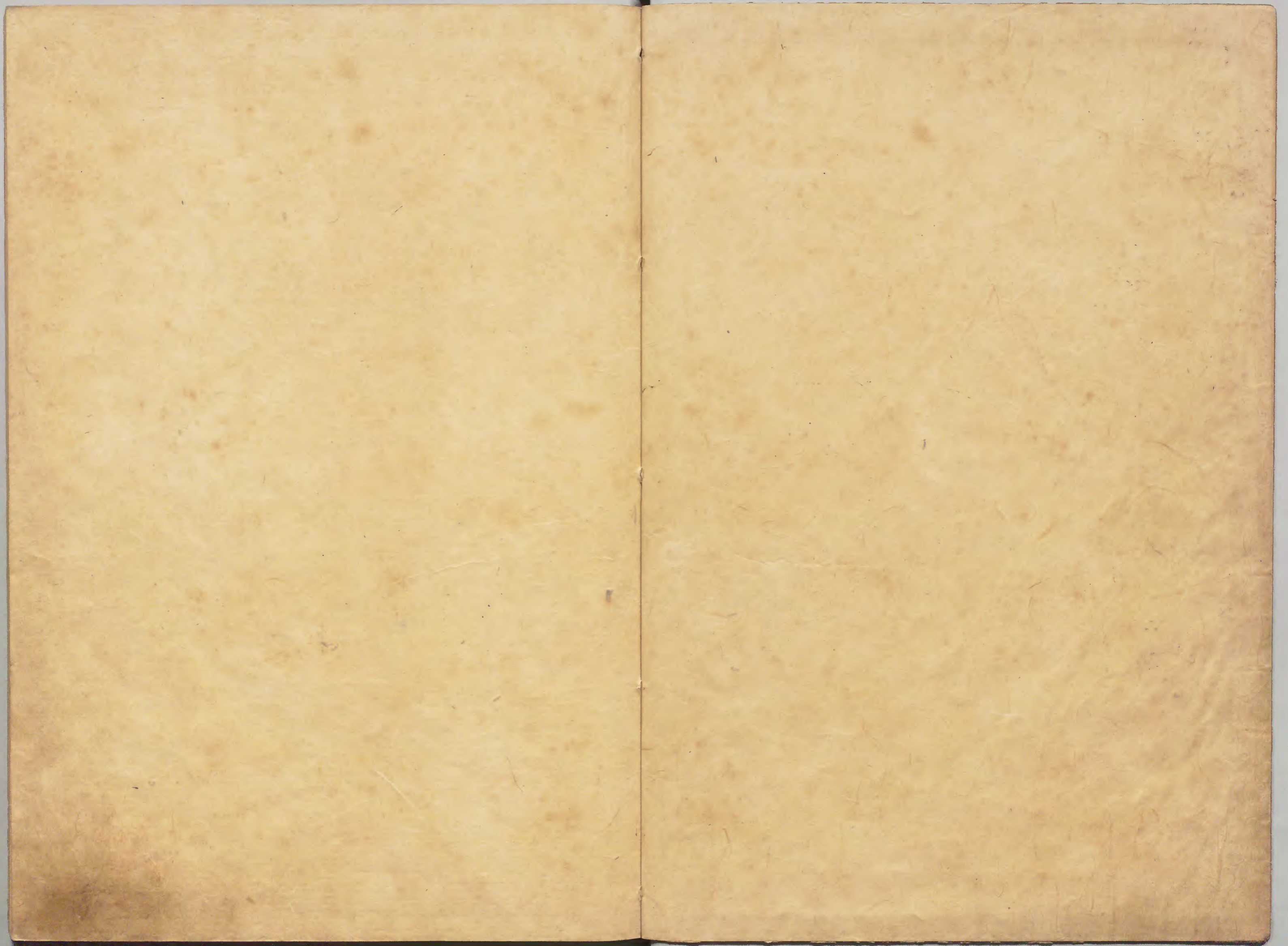


寛永諸家譜

藤原氏丙十冊之内五  
秀郷流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186( 91)		
函號	特	76	1





青山

天方

寛永諸家系圖傳

藤原氏

秀郷流

青山

丙五 小家

浅草文庫

家傳よりいへば秀郷の苗裔江列

藩生の庶流かりのち三列り

一は里額田郡百々村と領も累

代清当家より一より一より一より

と云く

忠門

友八郎 莊大吏

永祿六年三列本願寺門徒一揆の時

志むく軍忠ともげふりて

天正三年大忍弥太郎道心とて

えささ武田勝頼と忍崎乃城

引入とて志れども隠謀露頭せ

弥太郎誅せられぬ勝頼とて

比々々々西谷河足助の邊にお張と

先年乃兵とて小丸安戸邊

りり忍れ入民屋に火とて

うにともひく松平大濤の大吏と

びり忠門使とて川と忍崎

告とてふりちをせむつそ挑とて

月脇村左石りりともひく五月六日

終り討死とて時に崇六十又

重成ちかひ

宗右衛門

子孫別しよんべつ一系けいづ園ゑんと歌うた

忠成ちかひ

常陸介ひらりのけ

播磨守はりまのり

初はつ乃名な八はち友とも兼かね門かど

天正三年父忠門我死の後の家督

とつぎとく百と村と領と

同八年

東照大権現乃作ひがしあけのほろ

名徳院殿なとくゐん

同十又年とんじふねん後府ごふ一ひとととひひとと同とん

二十又人にじふにんとあとががうう久野くの殿どの

号ごう

同十九年とんじゅうくにんねん相列あひら中郡なかつぐんととひひ

食邑しょくいふ又千石またせんいふととりり

同年

名徳院殿なとくゐん上かみ海うみああるるとと聚樂あつらく

おおろろしし事こと三さん年ねん忠成ちかひ元もと

にししづみくくつた時を  
治料として江列よりとむく二  
千石の地と辨領と  
文禄三年従又位下に叙し常陸介  
小任と  
慶長六年上総下流お宿の内より  
とむく米地一万千石とむく  
ふりて

同年関東のをり職と掌て内後

修理亮清成と同くこれとむ  
同年騎士二十五人歩卒百人とあつ  
けられ常列江戸騎り  
この領地とむり

同十年

名徳院殿沙参内のも忠成騎馬  
少く供養し行列の最初

あり

同十八年二月二十日に卒し

六十三 法名珠光道的院号圆宗

忠次

友七郎

母之天方山城守通真入道夕雲が女

若年より

名徳院殿より近侍より

文禄三年に列位兼十九

忠俊

伯耆守 母上よりおか

天正十二年忠俊七歳のとき

大権現

名徳院殿より賜

同十八年小田原陣のとき忠俊

十三歳より

名徳院殿に

同十九年

名徳院殿御沙在治れとき忠俊

しりく上落し 湯前よりしりく

元服し友又郎忠俊と号す

其又長又年授又位下に叙し伯耆守

よ任す

同八年常列江戸橋よりしりく

又多名の地とお領し是又忠成

よりしりて濟士二十五人歩卒

百人とあづかる

同十年

名徳院殿御上洛のとき忠俊一組の引と

かりしりてきりぐみしりてしりる

同十二年赤井院番の引とあづかる

同十六年野列麻沼よりしりく又千

石しりくしりてしりる

同十八年忠成率しりて 作よりしりて

を家督しりてしりる

同十九年大坂陣のとき経中

よりしりて率しりてしりる



元和元年大坂再乱亦も尚ほし  
びなちり平野口よりしほく  
乃きしひさしびし忠後が即後等  
軍忠しとげふ  
名徳院殿されと感ししし湯攻陣  
つち経中の士数人軍功の褒り  
ありし  
日二年 作ししし  
將軍家よりししし

日六年武列岩築乃城ししし  
こ乃とちし力ちかの知りちか又し乃ちか  
一石とくししし都て四万三  
千石と築しし

日九年

將軍家將軍宣下赤坂湯参 日乃時  
忠後騎るにししし武列の室初

ししあり

日年湯劫氣しししし

名徳院殿乃作りりしより岩築の城と  
ありては、房列大多花乃城よりつる  
城付二万石かりそのち弟大花乃持  
幸成と使とてきたりて告ぐ  
いしく志ざしく領地の内より屏  
居とてとかりしをりしより又  
大多花乃城と城とてお列海村よ  
退居と

寛永二年

名徳院殿より幸成と清使とて  
を別よりしに於て援助せしむ

千石の地とてあり

同九年嫡男宗俊次男宗作与人

清正免とてありて忠俊も

向し幸成が領地より居とてあり

旨とて余あり六のゆへに相列

高座郡と泉村よりしにあり

同二十年四月に卒とて年

六十六 法名宗信

泰重

朝比奈宗孫太郎 母よりおかづ

朝比奈宗左衛門尉泰勝 養子より

子孫の系圖別よおこ

幸成

雅樂助 大薙女将 生國幸成

母よりおかづ

長四十年 幸成十四歳のとき

台徳院殿の清和よりしむく元服

一 友成と號と大久保相模守

忠隣 為命よりけり

清腰物よりしむく幸成よあま

同又年上秋景膳奥列り

謀叛と六月

大指現

台徳院殿東征一 小山守都宮よ

清陣よりしむく幸成又

忠成とせしむるに依りて山とむ  
七月石田治部が將三成畿内中  
五九列乃兵とありて江列佐和  
山一謀叛一伏見の城とむ  
一恒色とむさるるにいつし  
大指現軍と西一江戸の湯城  
小とひく軍兵と調こむ  
東海道と經く濃列湯を發

あり

名徳院殿を本曾路より伝列り  
發向し向く道嶮難あり  
急りしと馳事ありしとむ  
町のゆへは作よいしく軍士  
十又案より下を去るしぐみ  
し〜し〜事かかれとなり  
時一幸成十又歳六のゆへ  
あ〜い〜と〜と〜

日六年清菴せいあんよりくりくる清配せいはい  
膳ぜんの役やくよりしむ

月七年下総しもとのくに玉臼井村たまうすいむらよりしむ  
兼地かねち又百石またひゃくしやくよりしむ

日九年又月清勅せいしやく氣きよりしむ  
ゆりゆりよりしむ

日年十二月清せい五ご然ぜんよりしむ  
日十年の義ぎ

台德院殿たいとくゐん御入浴ごにやく此こゝよりしむ  
徳とく院ゐん殿ゐん御入浴ごにやく此こゝよりしむ

江列えりつ永原ながはらの清殿せいゐんよりしむ  
作しやくよりしむ

の役やくよりしむ  
とよみとよみ徳とく又また位ゐ下げよりしむ  
叙じゆを

日十七年下総しもとのくに玉臼井村たまうすいむらよりしむ  
千石せんしやくよりしむ

日十八年二月又忠成ちゅうじやう卒すつよりしむ  
のちのち領地りやうち一万六千石いちまんろくせんしやくよりしむ

小分せうぶんよりしむ  
幸成きやうじやう千又百石せんまたひゃくしやく

と并願とく

同十九年又月沛勃氣とが  
ゆり

同年十月大坂沛陣より幸成

ひりて幕下より得て先鋒奮ち

忠後が陣よりあり十一月冒先

手の兵と見えし時幸成

一騎平野より急りる事馳

然とも其間おころ幸一里を

りかれを頼む事なむと

わがゆへりこの日より升候

掃部頭直孝より一属と見え

手にあり

元和元年正月大坂の圍と解

二月

名徳院殿江戸の沛城よりを

より三月沛勃氣とゆふる

同年の夏大坂再亂より

四月十日より清色發あり幸成  
供奉とつし又月七日大坂の  
城にめぐに落徳軍先とあり  
あて成中にいづれ入幸成  
も又城中より入郎後木口人  
首級とゆきり幸成されと率  
て清前より福一 名徳  
りあり

同年の秋

名徳院殿江戸の清城小 還御

ありと又月六日ちり乃  
金藏一 行ふとちり并戸左の助  
喜山作十郎を山平右衛門父子  
大指舌右衛門等城中の榎乃中  
等月曲輪等の云々にとちり  
名敵乃首ととちり 清前に  
福とちりとちり幸成と調とあり  
するよりとちりと言ふとちり  
迎友とちり

も又云上——いそく敵と討  
沛前より福——いそくつえ  
とほるも本、疵とくゆり  
歩つふそせらるゆへ城中より  
とひく幸成りり告と云く  
されりいそく幸成とめれく  
同せ給ふと本、幸成のれが  
院人とかふ

日又年常列新治郡七千石

筑波郡三子石郡一万余石とく  
いそくつえ

同年作とくゆり沛寺院番  
からびよ沛小姓組小十人の組以  
とまり

同年作とくゆりいそく  
評定乃席より列と

日九年遠別天方村三千石と  
くいそくつえと云く、作



いそく外祖父天方山城守入道累  
代の本領するよりいそくこれと  
くださるるとさかり

寛永三年九月四日二條の亭に  
行幸あり中宮同行啓乃とき  
幸成騎るにそく供奉と川と  
月又年十月 作とつゆり  
を書り連判と

同九年正月二十四日

名徳院殿薨御の後向

將軍家乃命りいそくを去

に連判と

同十年二月を列懸川の城を  
いそくより二万六千名と領と

同十一年六月

將軍家涉入洛のととき、晦日懸川

の城より 澄浄あり幸成御  
ととき八月 還浄のととき又

能川乃城一 後治あり湯膳を  
献ぐる事戸へのごとく一聖朝  
七子名の地とくく戸を其  
同十二年八月拵列尾崎の城  
一りりつりく又万石を領を  
同十七年七月生駒氏欠玉乃  
と年八月作とらけりりり  
て井上筑後守政重ととりた  
積列一りいりり玉政と沙法を

通直

天方俊あち 母上よおふ  
介祖父天方通直が家と継  
系國別一りおし

女子

母上一り同

川口長三郎 迺次が妻

幸利

大膳亮 生母武藏 母を小お氏が女

寛永九年十二月二十九日 位下

叙

日十一年六月 入洛の供を

川口

幸通

左迺 生母同お 母上におお

幸正

左迺 生母同お 母上におお

幸高

左迺 生母同お 母上におお

女子

堀養作守親昌が妻

女子

女子

某

虎助 生國武茂

母之加茂式部少輔明成が女

女子

宗俊

同幡守 母之太保次右衛門尉忠佐の女

元和三年宗俊十回歳乃と云

名徳院殿

將軍家と并しとあり

同六年従五位下より叙し同幡守

より任じ

同九年

將軍家涉入洛乃と云、宗俊作と云

母り 名譽りり一日先立く上洛と

寛永三年父忠俊を列よた遷と

たれりりよるよる宗俊もたぶく

屏飛と

同九年涉無免と云母り

同十二年涉本院妻乃頭と云り

武藏お控と云乃内りりよひく三年

石の地と孫領と

宗俊

孫八郎 母と云りおかど

外祖父忠俊や一かひく子と云

元和三年宗俊十歳乃と云

名徳院殿

將軍家りり福りりなる

寛永二年忠俊右遷乃時宗俊も

おかしき列よいなる

同九年清惠院とつづめる  
同年の冬清本院番の經より入  
同十一年の冬合祿と終る

忠業

大学

女子

母宗俊よりおふ

瀧川を改む

正利が妻

女子

母より同

稲系氏部少将一通の妻

女子

母より同

中根又右衛門正次が妻

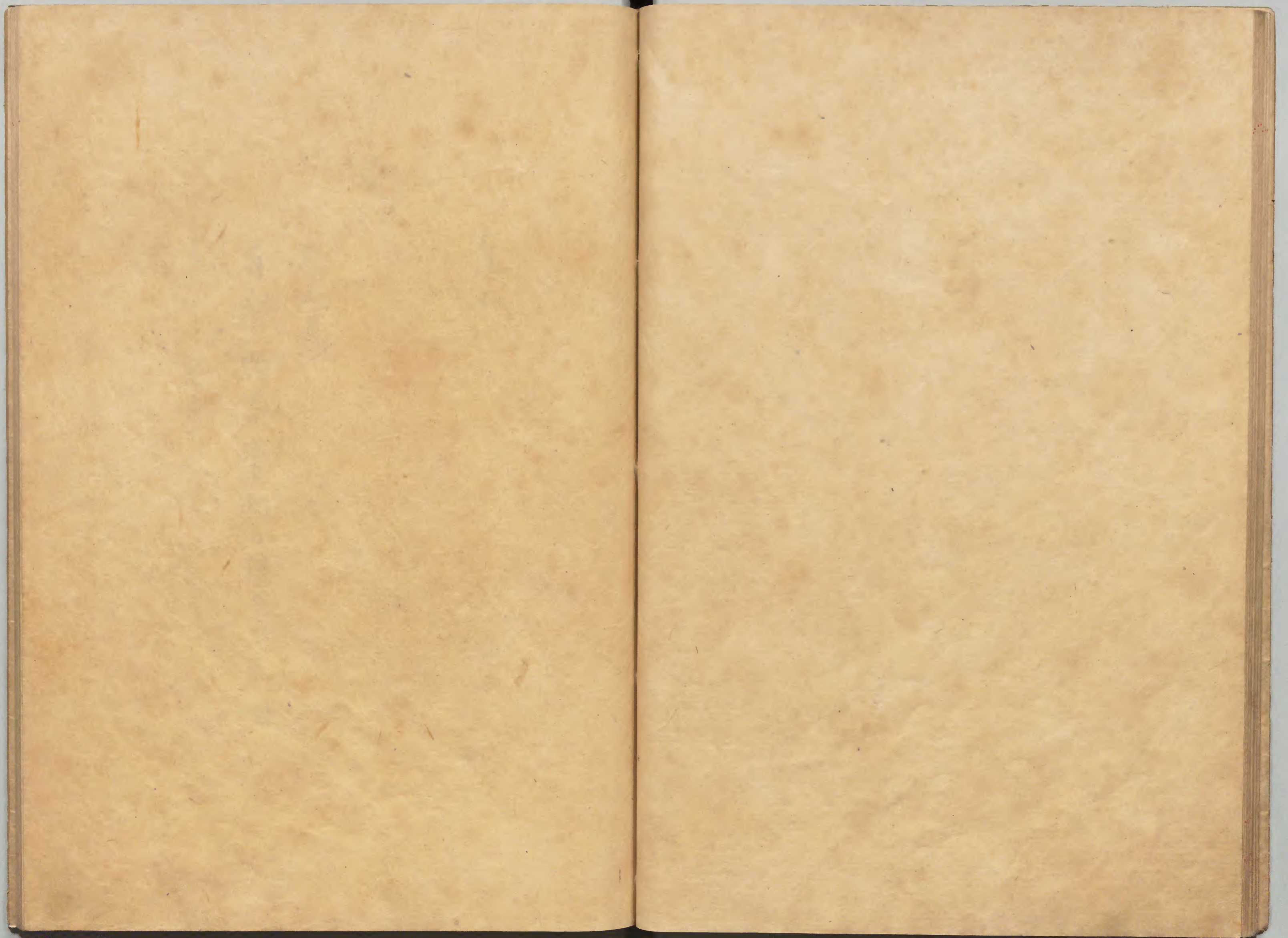
女子

母上に同

川口源兵衛正信が妻

家紋 系菊一花二系

忠成より以来裏袴と流紋とを



忠門 ちゅうもん

青山

喜大吏 きだいし

青山大膳亮 幸利が祀るり系圖 けいず

上 うへ 一 いち 二 に 三 さん 四 し 五 ご 六 ろく 七 しち 八 はち 九 く 十 じゅう



重成 しげなり

惣七条門尉

生玉冬河

法名道西

正長 よしみち

善右衛門尉

生國同前

東照大権現りつふくく下門る

天正三年冬列長篠名義なりとき

言名

同十二年長久手名義なり首級しゅけい

此こゝ時とき病やまひととゆゆ

慶長五年清歩り乃頭なり

同六年

名徳院殿乃清姫なり君きみ加列か利り帝てい

嫁よめ一ひと海うみふふときとき正長よしみち作しやくとと

ゆゆりりくく供く奉ほうとと法ほふもも加列かあり

事こと日久ひさ一ひとううののちちめめははくく江え戸と

りり人ひと家か

同十二年正月十一日より死に案又  
十九 法名昌霧

重次

又六郎 生國より村分り

志山とありてめく小林と稱す

大指現よりつてくつりし

天正三年冬列 長藤名義より

供養より敵兵一人と討せり

同六年強列を同名義より供養

同八年冬列色尾正陣乃とあり

供養なり

同九年冬天祿より供養なり

同十二年四月九日尾列名久手

名義より供養より沸る乃前より

とありて敵兵本下勅解申討す

と首とせりて敵兵討す

持て重次が股と突又日祇とあり

母の事三ヶ所あり重次を討て

うむひとわくく人海

同十八年國東津入玉乃水

長久手りりしむく病と

り行歩自由あしとこ乃ゆよ

供をとらるとあつて三列

とぶし居とろのち江戸

みしり

元和又年十月六十七歳

病死 法名祐念

正成

善助 生國より一松

長文十二年八月二十一日

死

重勝

源吉兼尉 生必茂翁

長文十七年二月後弟重忠

付とありし伏見乃城



重長 しげなが

善四郎

生必丸河 なまがわ

天正十二年重長七歳なりきとて

めく

大権現より 禰湯 ねゆ

同十三年 名命とてけしきりて

名徳院殿より 信久とてけしきりて

大権現湯鷹野殿とてけしきりて

作よりいそく刀より 徳とてけしきりて

こまわ

同十八年小田原陣より 徳奉 とくほう

同三年 湯艾者とてけしきりて

同六年 父正長よりいそく湯奉行

乃 既とてけしきりて 湯艾者とてけしきりて

同十二年 湯持荷乃 既とてけしきりて 湯使

とつとてけしきりて 又りとの

同十九年 大坂陣より 徳奉 とくほう

元和元年大坂再陣乃とまき平長  
ふとくせく城中に入れ陣と合  
くともふり敵乃陣とくたひとり  
つわりの首二級とぬり  
寛永十六年十一月四日一死と案  
六十二 法名門家

利政

新九郎 生必茂翁

重長が糶子となる實ハ公助正成が  
子かり

寛永十三年三月十又日

將軍家より孫瑞と

同年八月清小姓組より列一清書と

了と

重綱

長又郎 生必より一松ふと

まねこれとや—かひく子とさゝ實い  
源古鬼げつ耐がを勝かが子こあり

家紋 葉菊はぎく

秀郷六代

●公清

天方

家傳りいらく元々首藤と称ど  
其後と通秀りいらくを列  
天方乃城と長とこ乃ゆへよあ  
しめ月々々称号ととと

友承の尉

檢北遠使

佐友と号と



母ハ石見島大江良真が女

助清すけはら

主三首 首藤乃祖なり 久列り  
居住り

助通すけとほ

首藤権与 源於義朝臣乃郎後七騎乃内一人也

親清ちか

首藤大 左衛門尉

義通よしみち

刑部丞 山内と号り

俊通とよとほ

源に 刑部丞

保元平治乃同名哉乃と云、義朝  
志すべし、く屢軍功あり

俊綱とよつな

ふじの乃名を俊成とよなり三郎

経俊つとむ

経口三郎

通基とよき

山内六郎

通景とよかげ

俊月とよづき 淳正少弼じゆんせいしょうひ

通保とよたけ

七郎 大翁大捕おほおきなとら 法名通岳ほうなむとよがく

實ハ里見又太郎 氏義が子なり

通隆 みちたか

兵衛三郎 土衛門尉

小條の時滅亡乃とき、徳念よとひく

自害とく

某

太郎

刑部丞

某

又三郎

主の首

通弘 みちひろ

藤内を衛門尉

土衛門尉

通秀 みちひで

三郎

其後与

法名泰三

遠列えんりつ天方あまがた乃城のしろ一居いと云々  
のち天方あまがたと称号しょうごうと云々

通良とらう

小左郎 右衛門尉 法名道清どうせい

通泰とたい

又五郎 民部少輔 法名通仙つうせん

通貞とてい

小左郎 藏人 法名道的どうたつ

通季とせき

又三郎 彈正少弼 山城守  
法名道分どうぶん 院号藏雲

通植

四郎 臣部久補 冬河守 法名  
この普 院号長泉

通興

四郎三郎 三河守 乃らよ山城守と  
あゝゝゝ  
とどめ川氏真より所と氏真没

乃ら石川伯耆守教正と奏者と  
し

東照大権現よりお瑞一を家  
天正二年

大権現大久保七郎吉兼の討忠世より命が  
くを列乾乃城とせりむ討り

通興 作とふりてはるるに案  
内者とちる是よりふりてはるるち

大久保忠世が経より所とてむ

軍功あり

長元元年七十九歳なりと病死と

法名夕雲 方太与と号すと

女子

天野宮内右衛門尉が妻

通永

吉作与 法名通雪

殘道

お家

女子

伊豫田中右衛門尉一正が妻

女子

白幡庄兵衛尉が妻

通供

白殿

白幡庄兵衛尉これと妻はく子とと

通秋とらふ

二郎右衛門尉

女子

青山横磨守忠成あしやまの妻め

通之とらふ

長十郎

早世はやせい

女子

酒井仙右衛門尉重勝しげかつの妻め

通綱とらふ

孝後たかごと乃らのらりり山城やましろとあり

しむ

通景とらふ

四郎三郎

綱房つなぶ

半又郎

女子

門奈と進右衛門尉俊隆が妻

通勝

又市右衛門尉

通正

金十郎 乃らよと水とわらふ心

女子

女子

小嶋権太夫好勝が妻

女子

朝倉小刑部元忠が妻

孝明

従五位下 織部正

朝倉女三郎政孝元とや

かひく子とよ



通友 みちとも

新吾忠尉 しんご ちゆうゑう

通章 みちあきら

長次郎 早世 ちやうじ ちゆうせい

名徳院殿よりつとをく清小性と  
あり

某

傳八郎 早世 でんぱちろう ちゆうせい

通直 みちただ

従父位下 伯父とすめをまはさる助 じゆふゐかげ ちやくふとすめをまはさるすけ

とあるく 生國を以 なまくにをもち

介祖父道興これとやいかひくる すけいそふみちかきこれとやいかひくる

ととて実を青山揚磨を忠成が子也 ととてまをせやまやうまをちゆうじやうがこ也

孝文長八年

大権現寺入洛乃とす通直十又歳 おほいけんじやうにらく乃とすみちただ十またさい

ありく供をなす ありくくわをなす

同十年十二月廿六日念色五百石 どうじゅうねんじふにがつにじふろくにちねんしきごひやくいし

とくすりり

同十三年九月又日二百又十石と  
くすりり

同十八年二月二十日実父忠成卒

〜のち忠成が領地とわらち千

又百石とすりり都く二子二百又

十石あり

同十九年大坂御陣より供なと

元和元年大坂御陣乃時供なと

つとめ又月七日天皇乃急よとひく

戦功あり

同六年正月

台徳院殿乃作とくゆつと水小性組

乃此とある

同九年正月あ〜〜ゆ〜ゆ本院

藁の組とある

寛永二年十月廿三日幕地乃御朱

戸とある

同三年十月三日從又位下いごわげに叙よ  
後いごおちりの任にじと

同七年十一月二十二日四十二歳し  
率しとと法名ほふ常じ茂も

若丸わかし

母はは之の堀ほり東とう市いち正せい利り重しむらが女むすめ 早はや世よ

後直ごちき

父ちち之の武ぶ列り江え戸と子こ生なま家け 母はは上かみり

おが

寛永三年後直九歳こ初はつ々と

名徳院殿

將軍家しやうぐんけと祿ろく礼らい一いつ々と

同七年父通直とうちき死ししてのららるる是こゝ

跡あとととりり

名徳院殿なとくゐん一いつ々と

同九年十月

將軍家しやうぐんけ一いつ々と

同十三年十二月中根大隅守が從  
り居し書院番とす

女子

母ハより紫ト迎藤縫殿助用一

書

通次

後十郎

女子

家紋 一文字

